

【研究ノート】 チェルノブイリ・旧プリピャチ住民への聞き取り調査備忘録：フクシマそして原発を考えるためにも

川野徳幸

広島大学平和科学研究センター

**Research Note for the Interviews with the Residents Who
Used to Live in Prypiat near Chernobyl, Ukraine**

Noriyuki KAWANO

Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

This research note is a memorandum for our interviews with those who lived in Prypiat city near the Chernobyl Nuclear Power Plant. The inhabitants in Prypiat had to be evacuated to other places due to the nuclear accidents in April, 1986. We conducted the interviews with them in order to examine one of several aspects of the socioeconomic and psychological sufferings they endured. The results of our survey show that there are some remarkable damages such as loss of property and home; disintegration of labor ability, places of education and community. They had to accept unemployment or transfer to lower employment as a result of the unexpected evacuation. They also experienced friction between Pripyat residents and Kiev residents because the Pripyat residents received priority for housing to those who lived in Kiev. In addition to these kinds of socioeconomic effects, they have experienced psychological effects caused by radiation. They have still anxieties about their health in the future because they recognized that they were exposed to radiation after the accident. Now, we have to think about Fukushima in the future including the compensation and allowance for the victims of the accidents, and to discuss whether we should continue to use nuclear energy or not. Lessons from the Chernobyl accident will give essential viewpoints when we consider these important issues.

はじめに

2011年3月12日、福島第一原発事故が発生し、その結果、約78,000人の住民を対象とした警戒区域、そして、約10,500人を対象とした計画的避難区域がそれぞれ設定された¹。これらに、特定避難勧奨地点居住の住民、自主的避難住民を加えれば、確実に10万人以上の原発周辺地域住民が避難生活を余儀なくされている。帰郷の時期については、明確なことは提示されていないが、今春以降には年間被曝線量に従い、現在の避難区域を3区域に再編することは決まっている。年間20ミリシーベルト以下の「避難指示解除準備区域」、20～50ミリシーベルトの「居住制限区域」、そして50ミリシーベルト以上の「帰還困難区域」がそれである。この再編は、中長期的に帰郷を果たせない住民が少なからずいることを政府が認めたことを示すと同時に、該当地域住民がこれまで長い時間をかけて構築してきた社会基盤を否応なしに放棄せざるを得ない現実をも提示している。そもそも原発事故による社会基盤の崩壊は、福島第一原発事故後に乱用された「想定外」だったのか。私たちはそういったことを想像すらできなかったのか。いやそうではなかろう。「想像しなかった」だけなのだ。今から26年前のチェルノブイリ原発事故はそういった「想定外」の出来事をわれわれに既に提示していたからである。

本研究ノートの目的は二つある。第一は、チェルノブイリ原発事故によって、避難を余儀なくされた原発の町・旧プリピャチ住民への聞き取りを手がかりに、チェルノブイリ原発事故被害の一端を素描することである。これは、チェルノブイリ原発事故とは一体何だったのか、あるいは原発事故はわれわれに何を問いかけているのか、という大きなテーマを考える際の重要な素材となるであろう。同時に、これは福島第一原発事故とあわせて、原発の是非を考える際の重要な視点を提供することになるだろう。第二の目的は、警戒区域、計画的避難区域等に指定され、避難を強いられた福島の原発周辺地域住民の今後の補償・手当のあり方に若干なりとも寄与することである。

¹ それぞれの対象住民の数は、2011年5月4日『朝日新聞』の発表。

なお、本聞き取り調査の全文は、広島大学平和科学研究センター発行の IPSHU 研究報告シリーズにて近く公開する予定である。

対象と方法

聞き取り調査は、2009年6月11日・12日、2009年12月17日、2010年5月25日・26日の計3回実施した²。対象者は、1986年4月26日発生のチェルノブイリ原発事故当時、旧プリピャチ市に在住し、現在、キエフ市に居住する各世代10名である。対象者選定は、旧プリピャチ市避難民の互助団体「ゼムリャキ」に依頼し、各オーラルも、キエフ市内ゼムリャキ・オフィスにて行った。質問は主に筆者が行い³、キエフ市在住の竹内高明氏（特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部・ウクライナ駐在員）が通訳した。対象者の基本情報は次表の通りである。なお、質問要綱については、その抜粋版を巻末に付した。

² これ以降、2011年9月にも実施している。本調査は、筆者代表の科学研究費による事業の一環で、今後も継続の予定である。

³ 調査メンバーは次の通り。2009年6月調査：今中哲二京都大学原子炉実験所助教、2009年12月調査：福場美千子帝京大学病院医師、2010年5月調査：今中哲二、小宮山道夫広島大学文書館准教授。

表1 対象者基本情報 (以下、聞き取り順)

生年(調査時年齢) <事故当時年齢>	性別	人種	宗教	最終学歴	事故後の居住略歴等
1978年(30歳) <7歳>	女性	ウクライナ人	キリスト正教	大学経済学部	プリピャチ生、1978～86年4月：プリピャチ、事故後2週間：ヤブルニウカ村、87年10月までポルタヴァ州(ウクライナ中部)、それ以降キエフ在住
1945年(64歳) <41歳>	女性	ウクライナ人	キリスト正教	キエフ教育大学	キエフ州イヴァンキウ地区生、1972年～86年：プリピャチ、事故後87年4月までチェルノブイリ市、87年4月以降キエフ在住
1950年(59歳) <36歳>	男性	ウクライナ人	キリスト正教	キエフ工科大学	ヴィーンヌイツャ州生、1974年5月～86年：プリピャチ、その後92年頃まで事故処理作業、97年以降キエフ在住
1963年(45歳) <23歳>	男性	ウクライナ人	キリスト正教	専門学校(建設)	ドンバス生、1984年～86年：プリピャチ、86年4月～89年1月：事故処理作業、その後、キエフ在住
1943年(66歳) <43歳>	男性	ウクライナ人	キリスト正教	ハルキウ工科大学	ポルタヴァ州、1974年～86年：プリピャチ、86年～89年：事故処理、事故後キエフ在住
1970年(39歳) <15歳>	女性	ウクライナ人	キリスト正教	キエフ工科大学	ベラルーシ・ベロオジョールスク生まれ、1975年～86年4月：プリピャチ、事故後86年8月まで祖母のいるチェルニヒウ州に避難、同年9月以降キエフ在住
1976年(34歳) <9歳>	男性	ウクライナ人	キリスト正教	キエフ国立大学	ヘルソン州生、1981年～86年、事故後キエフ→ミンスク郊外→オデッサ州(サマーキャンプ)、86年9月末以降キエフ在住
1960年(50歳) <26歳>	女性	ロシア人	キリスト正教	専門学校(建設)	ロシア生、1980年～86年：プリピャチ、事故後キエフ→モスクワ→ウクライナ・エネルゴダール(ザポリッジャ原発)、86年11月以降キエフ在住
1955年(54歳) <31歳>	女性	ウクライナ人	キリスト正教	専門学校(医療)準医師	リヴィウ州生、1980年～86年：プリピャチ、事故後キエフ州イヴァンキウ地区→リヴィウ、86年11月以降キエフ在住
1938年(72歳) <48歳>	女性	ロシア人	キリスト正教	クラスノヤルヤルスク教育大学	ロシア・アスキス生、1970年～86年：プリピャチ、事故後ポリスケ→ヴォロネージ(ロシア)→パヴロフスク、86年12月以降キエフ在住

本研究ノートは、聞き取り調査で得た情報を基に、原発事故の一端を素描しようとするものであるが、幾つかの前提条件の内、重要な二点にのみ言及しておく。その第一は、本稿はチェルノブイリ原発事故による被害の全貌を明らかにするものではないという点である。旧プリピャチ住民で、かつ、現在キエフ市内に居住する10名から得られた情報を基に、避難・移住による社会的被害(「く

らし)」、心理的影響(「こころ)」について注目するものである。第二は、1986年の事故から既に20年以上が経過し、長い時間が経過しているという点である。20年という時間の経過が記憶の風化や変容を伴うことは容易に想像される。個人の記憶そのものが、希薄化したり、歪んだり、変容するだけではなく、例えば、ゼムリヤキでの公的私的コミュニケーションを通じて、個人の体験でない事柄があたかも自身の体験であるかのように記憶されていることさえ考えられないではない。これらの問題については、別稿にて論じたのでこれ以上言及しないが⁴、ここでは、避難住民の「くらし」と「こころ」に関する被害の一端を再構成し、そこからフクシマの問題、原発の問題を考える際の一つの視点を提供することに主眼がある。

プリピャチという町

人類史上最悪の原子力事故ともされるチェルノブイリ原子力発電所事故は、1986年4月26日午前1時23分、旧ソ連ウクライナ共和国にある「レーニン記念チェルノブイリ原子力発電所」の4号炉で起きた。その事故は、停電により原子炉が停止した際の非常用電源のテスト中に起こった。原子炉の出力暴走により、原子炉とその建物が一瞬のうちに爆発炎上した。炉心では黒鉛火災が発生し、大量の放射能放出が続き、その放射能は地球の北半球のほとんどを汚染するに至ったとされる。放射能放出がようやく終息したのは、事故発生から10日後の5月6日頃であった⁵。

この原発事故により、原発周辺住民約11万6千人が避難を余儀なくされ、ウクライナ政府によると168の原発周辺の村々が消滅したという。現在も原発から30キロ圏内は立入禁止区域(zone)となり、いまだかなりの高線量が認められる。例えば、われわれ調査班が、2009年6月チェルノブイリ原発を訪問した際、幾つかのホットスポットに遭遇した。地上1メートルの空間線量を簡易装

⁴ 証言を分析する際の理論的前提については、川野徳幸(2006)『カザフスタン共和国セミパラチンスクにおける核被害解明の試み：アンケート調査を通して』、IPSHU 研究報告シリーズ No.36、広島大学平和科学研究センターを参照。

⁵ 詳しくは、今中哲二・原子力資料情報室編著(2006)『「チェルノブイリ」を見つめなおすー20年後のメッセージ』、原子力資料情報室を参照。

置で測ると毎時約 20 マイクロシーベルトという高線量が測定された（写真 1）。

写真 1 チェルノブイリ原発周辺の放射線量（2009 年 6 月 15 日筆者撮影）



原発事故により消滅した 168 市町村の一つが、本稿で取り上げるプリピャチである。プリピャチは、1970 年にチェルノブイリ原子力発電所職員の居住地用として造られた町である。当時の人口は約 5 万人で、市中心部から南に 4 キロの位置にチェルノブイリ原発があった。写真 2・3 が示すように高層住宅が建ち並び、当時としては近代的な町であった。そればかりではなく、当時の住民の話聞く限り、様々な文化・福祉施設が充実し、生活水準もかなり高かったようである⁶。オーラルから判断する限り、新たに建設された原発の町ということで、多くの若者が夢と希望を持って、入植したのではないかと思われる。実際、聞き取り対象者の一人は、「その当時としては、プリピャチというのは大変活気のある町で、休日であれば何らかの催しが必ずあるような町でした。一家でスポーツをやっていたりする人も多くて、大変活気がありました。（50 歳女性）」

⁶ 同様の指摘が、2011 年 10 月 31 日『朝日新聞』にもある。

と証言した。

写真2 旧プリピャチ市街（2009年6月15日筆者撮影）



写真3 手前が旧プリピャチ市街、奥手にチェルノブイリ原発が見える（2009年6月15日筆者撮影）



「くらし」と「こころ」の被害の一端

聞き取り調査を通し、社会経済的被害の一端として、資産・家屋の喪失、労働・教育の場の崩壊・喪失、コミュニティーの崩壊・喪失、経済レベルの低下、生活手段の喪失、失業が浮かび上がってきた。筆者の「原発事故で自分の人生が狂わされたという思いがありますか」という質問に対し、30歳女性は「はい。もし事故がなければ、いまよりも、もっといい生活、人生があったかもしれないし、いまとは違うふうになっていたのではないかという気持ちはあります。」と回答した。続けて、「一番変わったとすれば、何が変わったと思いますか」に対しては、「・・・まず、それまで住んでいた住居とか、あるいは学校、仕事から引き離されて、また一から生活を始めなければいけなかったということが、一番心理的に大きな影響を与えていると思う。」と回答した。また、64歳女性は、同質問に対し「・・・もう完全に生活、人生が変わってしまいました。それまでは安定した生活があり、明日という日について不安もなく、子どもも大きくなって、無事に学校を終えて将来がある。問題というほどのものはなく、安心して安定した生活を営んでいたのが、突然失われてしまって、何も持つものもない状態になってしまった。次の瞬間、何が起こるかわからないという状況でした。・・・」と証言した。

プリピャチからの避難は、原発事故翌日の4月27日の14時から始まった。同日正午頃、避難指示のラジオ放送が流れ、身分証明書、三日分の食料などをもって避難するよう指示があった。大方の住民はすぐに戻れると期待したが、プリピャチに戻ることは二度となかった。結局、全ての住民は、最低限の衣食のみを携帯しただけで、全ての財産をプリピャチに残し、それらを放棄せざるを得なかったのである。事故当時、15歳だった女性は、若干の食料と本1冊のみを持って避難したことを語ってくれた。また、住民が事故後に最も衝撃を受けたのは、プリピャチへの帰還が二度と叶わぬという現実を知ったときであった。その際の喪失感を当時41歳だった女性は「・・・事故後1週間ぐらいたってから、やっとゴルバチョフのテレビ放送があって、もう住民は戻れないと言われました。そのときに私はヒステリー状態になって、誰か近い人が突然亡くなってしまったかのような状態でした。」と訴えた。

聞き取りでは、現在の健康状態と子供の健康不安についても聞いた。ほとんどの回答者が、自身と子供の健康についての不安を口にした。例えば、30歳女性は甲状腺疾患を訴え、64歳女性は、事故後に頭痛がはじまり、心臓疾患等の発症があると指摘した。彼らに共通するのは、それら疾患が原発事故によるものだという認識である。また、「避難時の体験、または避難後の辛い体験など、夢で見たり、日常生活の中で思い出すことがあるか」という質問に対しては、事故後に避難する際の不安な心情を語る対象者がいる一方で、実際、事故処理作業に従事した、いわゆる「リクビダートル」は、作業時の情景が忘れられないと訴えた。聞き取り対象者の一人、45歳男性は、事故処理作業にあたった2年間を「戦争をしていたかのような感じだった。ただ、その敵が何だったのかというのは、誰にもよくわからない」と述べ、その時の情景をよく夢で見ると答えた。以下はオーラルの一部である。

質疑応答の一部抜粋

川野：事故後の処理でいろいろな作業をされていたと思うのですが、それに関する情景を夢で見たりすることはありますか。

45歳男性：よくあります。そこでやっていた仕事については、よく夢に見ます。それは、恐怖です。ちなみに、1988年には、4号炉の周りをコンクリートの塀で囲むという作業をしました。その作業は、4号炉そのものから100メートルないし150メートルぐらいのところで、ずっとやっていました。(中略)これは、もう消えることのない記憶だと思います。

川野：目覚めたら、どういう感じがしますか。

45歳男性：抑鬱感でしょう。

聞き取りでは、「チェルノブイリ原発事故被災者であることで偏見や差別を受けたことがあるか」という質問項目を設けた。10名への聞き取りの中で、半数の5名が、キエフへの移住後に生じたアパート配給を巡る偏見について言及し

た。例えば、72歳女性は、「・・・配給時に「自分たちが待っていたアパートも家具も、全部あなたたちが持って行ってしまっ、もう何も無くなるとか、大変不愉快なことを言われたことがあります。学校でも子どもたちがそういうことを言われたことがあります。」と述べた。キエフでのアパート配給時に、地域住民との優先順位を巡っての軋轢があったようである。これは、キエフに避難・移住した住民に特有のものかどうかは不明であるが、他地域に避難し、アパート配給があった場合、同様のケースがあったのではないかと考えられる。また、差別・偏見という観点からは、被災者としての手当に対するやっかみを感じると指摘する回答者がいた。これら無理解によるやっかみは、日本の原爆被爆者と類似する点であるのかもしれない。例えば、45歳男性は「あなたたちはプリピャチから来て、いろいろ恩恵があつて、特典があつていいですよ」と言われることが苦痛だと訴えた。

補足：チェルノブイリ原発事故被災者としての補償・手当

原発事故被災者として、次のような補償および手当の支給があるようである。まずは食事に対する援助である。150 グリブナ（現地通貨）⁷程度を毎月支給されているようである。食費に対する手当は、元来、放射線被曝していない食品を得るための手当であるとされる。また、二年に一回の健康診断、家賃・公共料金を半額とする制度もある⁸。またユニークなものでは、被災者の子弟の幼稚園および小学校4年生までの給食費が無料になるという制度がある。保養券の発券といった制度もあるようである。しかしながら、それらが、実際法律に従って施行されているかどうかは不明であり、多くの聞き取り対象者が、実行されていないこと、あるいは遅配に対する不満を述べていた。

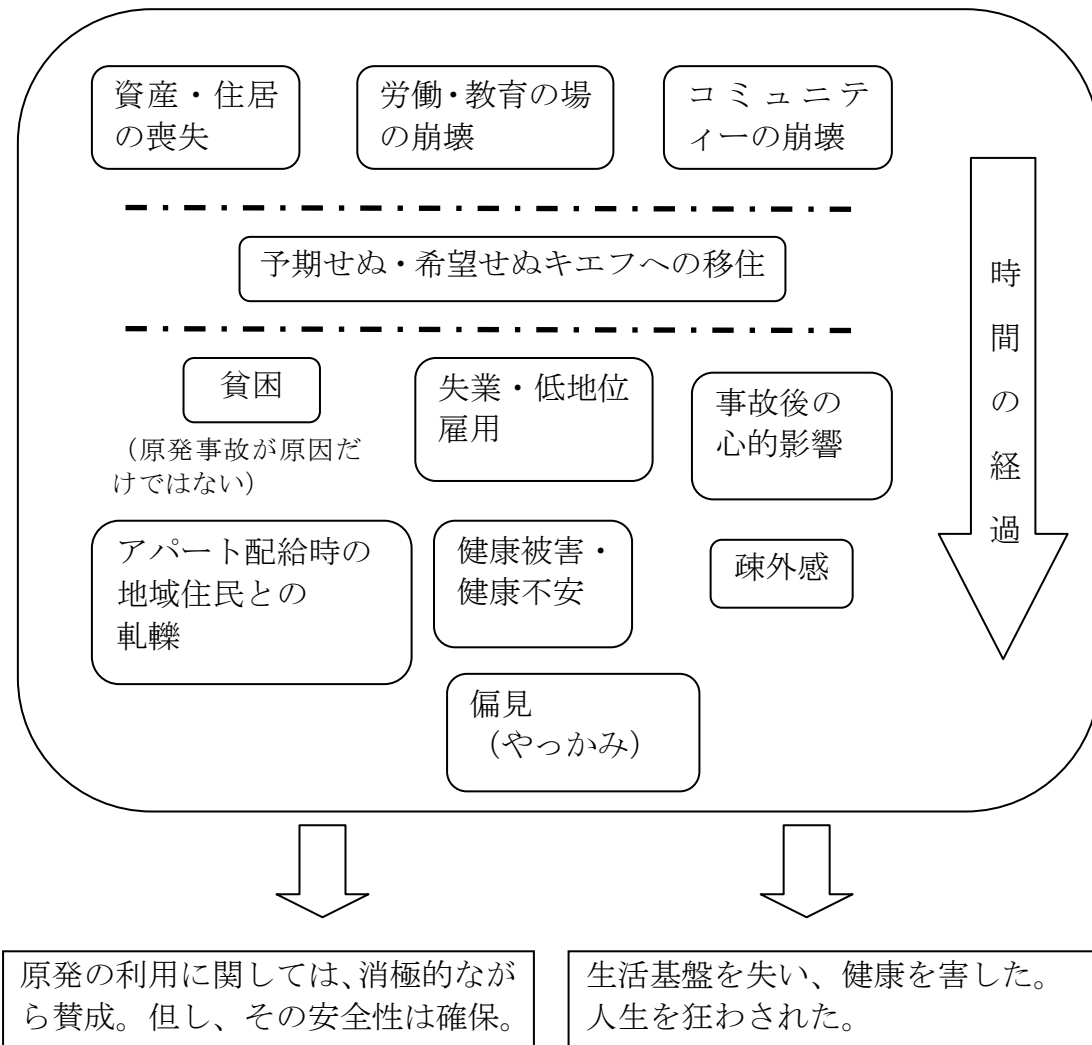
⁷ 一ヶ月の平均的な生活費は4,000 グリブナ程度。障害認定があれば、326 グリブナの食費手当が支給される。

⁸ 2010年現在。

若干のまとめ、そして今後のフクシマと原発を考える

わずか10名への聞き取り調査からではあるが、チェルノブイリ原発事故被災者の抱えた社会的あるいは心理的被害の一端が垣間見えた。それらをまとめると図1のようになろう。原発事故により、避難を余儀なくされ、キエフでの新しい生活を強いられた元プリピャチ住民は、移住によりこれまで蓄えてきた資産、雇用の機会を失い、それまで構築してきたコミュニティと決別しなければならなかった。希望せぬキエフへの移住を強いられ、その結果、不本意な雇用とプリピャチ時代に比べ低位所得を受け入れざるをえなかった。同時に、アパート配給時には地域住民との軋轢が生じ、それらと対峙しなければならなかった。それら社会的経済的影響に加え、放射線被曝による健康不安を抱え続けている。そして、そういった被害の原因は、あのチェルノブイリ原発事故だという強い認識がある。しかしながら、10名のオーラル対象者中、明確に、原発反対を唱えた対象者は1名だけだった。原発事故の原因を人的なものに帰結させ、安全性の確保を担保した上で、使用すべきだという意見が大方であった。もちろん、本調査は、2011年3月の福島第一原発事故以前に実施したものである。福島第一原発事故によって、原発の是非に対する認識に変化が生じたのかどうかは不明であり、今後の検討課題でもある。

図1 旧プリピャチ市民の原発事故による被害の一端



筆者は、これまでマス・メディアにおいて、チェルノブイリ原発事故被災者と原爆被爆者の経験を通し、福島第一原発事故の被災者・避難者に対して、どのような補償・手当が必要かを指摘してきた。その内、特に重要と思われる点を以下に確認しておきたい。詳しくは、注に記載した紙面を参照いただきたい。

第一は、原爆被爆者、チェルノブイリ原発事故被災者にならい、定期健康診断の実施であろう。原発事故で漏れた放射性物質の影響を懸念する避難者らの健康不安を軽減する一助ともなろう⁹。日本のいわゆる「被爆者援護法」を参考に保険・医療・福祉の充実に努めていくべきであろう。

⁹ 詳しくは、2011年5月11日『朝日新聞』「論！2011 ヒロシマ・ナガサキ」で述べた。

第二は、本論で議論した社会基盤崩壊への補償問題である。避難地での新たな生活を余儀なくされた住民に対しては、雇用の確保、教育の場の確保、そして新たなコミュニティーへ参加する際の円滑な橋渡しなどが必要となろう。また、雇用などが確保され、生活が軌道に乗るまでの手当は不可欠であろう。

第三は、放射線被曝を懸念する避難民の精神的影響、そして避難に伴う様々な心的不安に対する支援が不可欠であろう。原爆被爆者の場合、被爆による精神的影響が指摘されながらもそれに対する支援はほとんど行われてこなかった。福島の場合、避難生活等による精神的損害に対する賠償を設けたことは、評価に値するが、賠償だけではなく、医療ソーシャルワーカーの設置などもあわせて検討すべきであろう¹⁰。

研究という側面からは、長期間にわたる疫学調査と聞き取り調査が必要であろう。前者を全体の被害の平均値を映す調査だと位置づければ、後者は個人の被害という「点」を掘り下げるものだと言えよう。例えば、被災者の証言収集などはこれに該当する¹¹。被災者の声を貪欲に収集し、それぞれの被害の「深さ」を知ることなくして、被害の全体像解明には接近できないだろう。

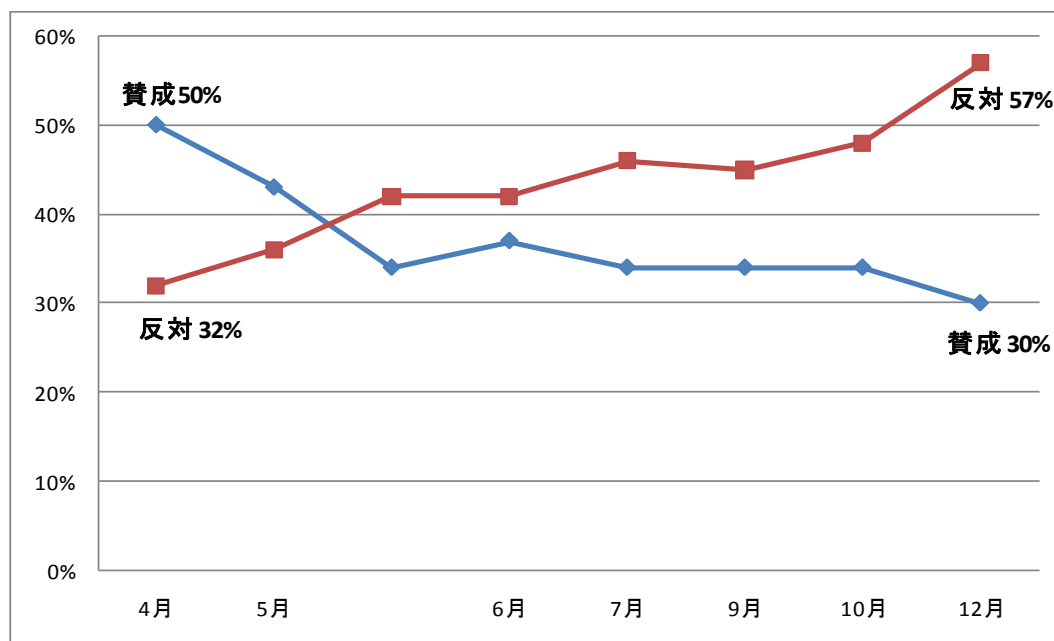
チェルノブイリ原発事故、そしてフクシマから、われわれは、あらためて原子力エネルギー利用の是非を考えるべきである。朝日新聞は、2011年12月10日から11日にかけて原子力発電の利用賛否について、全国定例世論調査を行った。その結果、反対が57%、賛成が30%であった¹²。4月以降の同紙の定例調査の結果をまとめたものが次の図である。

¹⁰ 東京電力の損害賠償については、<http://www.tepco.co.jp/comp/index-j.html> を参照。また、2011年9月1日『朝日新聞』には主な損害項目がまとめられている。

¹¹ 詳しくは、2011年8月30日『中国新聞』「今やるべきこと」で述べた。

¹² 詳しくは、2011年12月13日『朝日新聞』参照。

図2 朝日新聞による原発賛否調査の結果



(4月18日、5月16日、5月26日、6月13日、7月11日、9月10日、10月16日、12月13日に掲載されたデータをもとに筆者作成)

この結果が、民意の全てを反映したものとは断言できないが、一定程度以上の民意の反映であることは間違いない。しかしながら、日本政府のベトナムへの原発輸出という現実が示すように、政府の原発に対する態度はいまだ明確ではない。原発利用に対する政府と民意間での乖離が生じ、それが今後益々大きくなる可能性もある。ひとたびフクシマのような事故が生じた場合、その最も深刻な影響を受けるのはわれわれ自身である。放射線被曝のリスクに怯え、社会的経済的かつ心理的被害も深刻である。確かに、原発は、電力エネルギーを供給し、われわれはその恩恵を受けてきた。しかし、これまで、原発利用の負の側面については全く議論してこなかった。原発は、甚大な厄災をも与える可能性を秘めていた。その最たる事例がチェルノブイリ原発事故であり、福島第一原発事故であろう。原子力はまさに「諸刃の剣」であり、その事実をわれわれは再認識すべきである。それを承知し、国民の間で十分な議論を経、その利用を決断するのも「人類の選択」であり、「人類の知恵」であるのかもしれない。他方、それを使用しないという決断もあってよい。何れにせよ、その是非を判断するための「材料」は公平に提供されるべきである。その意味において

も、あらためてチェルノブイリ原発事故被災者の声に耳を傾けることは重要である。先に述べた政治と民意の乖離を拡大させないために、原子力の是非についてのタブーなしの議論と、それを政治に反映させることが、今何よりも重要なのではないか。

巻末資料 チェルノブイリ原発事故被災者聞き取り調査質問項目（抜粋）

質問1. 基本事項

- (1) 氏名
- (2) 性別 男 女
- (3) 生年月日（年齢） _____ 年 _____ 月 _____ 日生（ _____ ）
- (4) 人種 ウクライナ人、ロシア人、その他< _____ >
- (5) 宗教
- (6) 最終学歴
- (7) 出身地・居住歴・職歴（誕生から現在まで）

期 間	所在地（都市名）	職業

*1986年4月26日原発事故発生

(8) プリピャチ市を離れるときの家族構成及び現況

続柄	生年	現 況		
		生存	死亡（死亡年）	死因
本人				

質問2. 以下の質問について、1986年4月26日以前のプリピャチ時代と現在の両方についてそれぞれお答え下さい。

1. 自宅の形態（アパートの広さなどを含む）
2. 食事の内容
3. 仕事の内容
4. 世帯収入（一ヶ月）
 プリピャチ時代：その額は十分だったか。当時の平均的月収は幾らぐらいか。十分だったか。
 現在：（その額は十分か。現在の平均的月収は幾らぐらいか。生活はどうか。）
5. 生活上の不満があるか。 6. 思い描いていた将来設計
7. 特に苦勞と考えること（不安だったこと、不安なこと）
8. 健康状態
9. 健康状態に不安を感じることもあるか
 プリピャチ時代： 1. いつも感じる 2. ときどき感じる 3. 感じない
 現在： 1. いつも感じる 2. ときどき感じる 3. 感じない
 1. あるいは2. と回答した場合→
 それは、チェルノブイリ原発事故による放射線被曝が影響していると思うか。

質問3. 以下の質問にお答え下さい。おもに現在についてのことです。

1. これまでの自身の歴史を振り返って、原発事故のせいで自分の人生が狂ってしまったという思いがあるか。
2. 事故に拘わる体験を誰かに話して聞かせたことはあるか。それは誰か。また、それを誰かに伝えなければならないと思うか。それは誰か。
3. 今一番望んでいることは何か。
4. 原子力発電についてどう思うか。原子力というエネルギーは私達人類に必要だと思うか。何故そう思うか。

5. 避難時の体験、または避難後の辛い体験など、夢で見たり、日常生活の中で思い出すことがあるか。(1. よくある 2. ときどきある 3. ない)

「ある」方におたずねします。その体験内容といつ思い出すのか、をお教え下さい。

6. 出産や、子や孫の健康に不安を感じたことがある。(1. ある 2. ない)

7. チェルノブイリ原発事故被災者であることで差別や偏見を受けたことがある。

(1. ある 2. ない)

ある場合、それはどんな時だったか。

※これでアンケートの質問はすべて終わりです。ご協力いただき、ありがとうございました。

以下のテーマに沿って、ご自由にお話し下さい。一つだけでも、いずれもでもかまいません。

1. ご自身の体験の中で、今も忘れられないこと
2. 原発事故で亡くなった方々や次世代へのメッセージ
3. その他、訴えたいことや知らせたいことなど